

# Sato Project

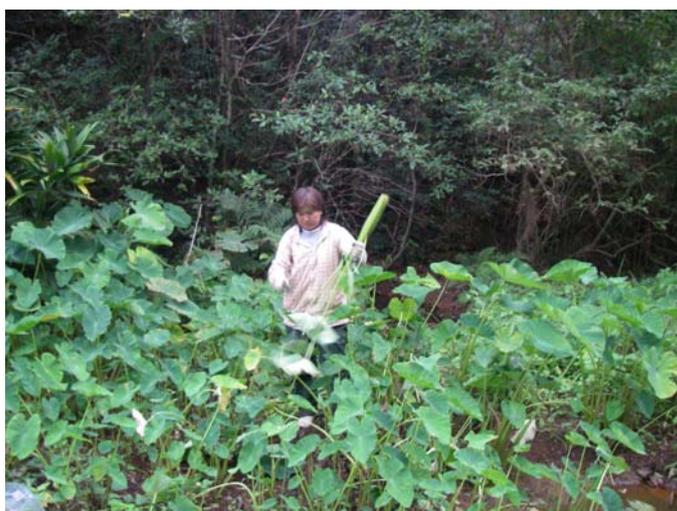
## Sato Project

### 農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境— 「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト(加藤) e-mail:[sato@chikyu.ac.jp](mailto:sato@chikyu.ac.jp)

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



奄美大島イモ畑 (撮影: 細谷 葵)

奄美大島笠利町・節田(せった)にて。タイモ、サトイモなどが混合して植えられている家庭菜園で、きわめて「キッチン・ガーデン」的な栽培法である

## ユーラシアセミナー第10回 「日本の南北と栽培植物」に参加して

細谷 葵 (総合地球環境学研究所)

## ユーラシアセミナー第10回 「日本の南北と栽培植物」（2009年2月21日）に参加して 細谷 葵（総合地球環境学研究所）

会場を瀟洒な同志社大学・新島会館別館に替え、いつもと一味違った雰囲気  
で始まったユーラシアセミナー第10回。聴講者も満員御礼でした。

「さまざまな栽培植物と農耕の文化」テーマの2回目となった今回のトピッ  
クは、「日本の南北と栽培植物」です。コメやムギばかりでない作物の多様性を、  
日本の中での地域性に焦点を当てて考えていこうというコンセプトにのっとり、  
バラエティ豊かな内容の基調講演2本およびパネラー発表2本が展開されまし  
た。

基調講演の1本めは、阿部純先生（北海道大学）の「ダイズの成立—遺伝的  
変異の解析から」。日本・中国に渡るマメの栽培化問題について、日本は東北地  
方、中国は貴州省、雲南省、さらにミャンマーまでの広範な野生マメと栽培マ  
メの姿やその調理法の実例を交えながらの講演でした。マメの栽培化問題は、  
縄文時代の食文化の問題にからめて、熊本大学などを中心とした植物考古学研  
究でも最近もっとも注目されているトピックでもあり、貴重な情報提供の講演  
となりました。

基調講演の2本めは、細谷による「日  
本の南北と植物食料—植物考古学の  
視点から」。北海道と沖縄における植  
物考古学の成果を紹介しながら、その  
先史時代食文化の多様性を論じまし  
た。植物遺存体分析からわかったこと  
によれば、北海道ではヒエ、オオムギ  
などの雑穀文化が縄文時代から擦文  
時代にかけて成立していましたが、沖  
縄では野生植物の利用が長く続き、9  
～10世紀頃に急激に雑穀やコメを対  
象とした農耕文化が始まるのが特徴  
的です。こうして大きく性質の異なる  
先史時代食文化をもつ北海道と沖縄ですが、中世、近世、近代へと時代が下る  
中で、その時々々の政治母体から栽培作物を規定され、「コメが主食」である「日  
本文化」に単一化されていきます。栽培植物の選択は政治・社会に拠ることが  
顕著であるとともに、現代の状況を単純に過去に当てはめて考えるべきではない



出番を待つ筆者。やや緊張しています。

ことがわかります。最後に、初期農耕期の生業のあり方を考える参考として、農耕に加えて漁労、野生植物採集など多様な資源利用をしているパプアニューギニアの事例を紹介しました。この事例の紹介も通して、農耕を始めたからといって必然的に人々の生活がドラスチックに変化するわけではなく、そうした変化はあくまで政治・社会の問題として起きるものであることを強調して終わりとしました。



ディスカッション風景

休憩時間を経た後半は、パネラー発表2本ののちにディスカッションタイムとなりました。パネラー発表の1本めは、石川隆二先生（弘前大学）による「日本に渡来した作物と地域における品種分化」。ブドウを主な例に挙げて、在来野生種の利用が渡来栽培種にとってかわられるという現象が縄文時代に起きていること、そうして導入されたさまざまな栽培植物の存在が、弥生時代へ向けて社会構造を変えていったことを論じました。

パネラー発表の2本目は、光田重幸先生（同志社大学）による「継続と再生の思想」。日本の正月飾りを題材に、マツやウラジロは年一回だけ規則正しく成長するので、再生の象徴とされることや、ツクネイモが段重ねのような形で増えていくのが鏡餅の形のモデルなのではないかなど、植物の生態と民間伝承の関係性について、斬新な話が展開されました。地元の深泥池の植物生態と文化の関係の話などもあり、身近な事例に皆興味をひきつけられたようです。

佐藤洋一郎先生を司会としたディスカッションタイムでは、客席の佐々木高明先生も積極的に知識をご披露くださり、北方の栽培オオムギの起源や、沖縄の稲作起源は本当に新しいのかなど話題にも渡って議論がはずみました。

一般フロアからのご質問やご意見が出なかったのは残念でしたが、アンケートには各講演・パネラー発表に興味をもった旨書いてくださった方が多く、よかったです。

柳田國男の「蝸牛考」しかり、栽培植物文化やそれにまつわる伝承なども、単一化されやすい政治的中枢から離れるほど、古い姿をとどめやすくなります。細長い日本列島の南北の様相に注目することは、本来の日本の栽培植物の多様性や環境への適応を考えるうえで非常に有用な視点であるという、認識を新たに第10回ユーラシアセミナーでした。